

# 令和6年能登半島地震の災害支援活動報告から得た学び －看護管理者の視点から－

○宇崎 恵梨, 城尾 恵子, 二神 涼葉 (社会医療法人三栄会 ツカザキ病院)

## I. はじめに

令和6年1月1日に石川県能登地方で最大震度7の地震が発生し、令和6年能登半島地震と名付けられた。今回、発災から約5か月が経過した5月26日に、石川県珠洲市に災害支援活動に参加することができた。災害看護研究所と災害看護学会が企画した「珠洲市復興ささえ愛プロジェクト」に参加し、初めて災害支援活動を経験した。この災害支援活動の体験を通して、被災地から学んだ復旧・復興期の現状を、A病院における減災活動に活かし、看護職員の災害危機意識向上を目指したいと考えた。

## II. 研究方法

### 1. 実践研究

活動概要：特定非営利活動法人災害看護研究所のスタッフに同行して珠洲市復興ささえ愛プロジェクト活動を行った。被災者住民が企画した「珠洲復興マルシェ AkaAka」と名付けられた地域コミュニティ（AkaAka）に、日本災害看護学会、石川県立看護大学学生と協働で参加した。帰院後、活動内容について、A病院看護部災害対策支援委員会（以下：委員会）で意見交換した結果を考察した。

2. 倫理的配慮：本研究は、A病院倫理委員会の承認を得て実施した。

## III. 結果

今回の災害支援活動の目標は、参加された被災地住民から生活上の様々な思いを傾聴すること、コミュニティ及び生活再建に関する問題や課題を明確にすることで活動を開始した。私達は、ジェルクヤンドルやハーバリウム作成のサポート担当し、被災地住民と同じ時間を過ごした。仮設住宅で地元に残って生活されている方、仕方なく珠洲市を離れた方々が参加され、老若男女問わず様々な体験をされていた。AkaAkaに参加している者全員から多くの笑顔がみられた。帰院後、自施設の委員会の中で活動報告を実施した。委員会メンバーからは「実際に被災された方からの話が知りたかった」「災害を身近に感じ、部署での活動を頑張らないといけないと思った」などの発言が聞かれた。

## IV. 考察

A病院の地域は被災地経験がなく、看護職員全員の危機意識が高いわけではない。災害よりも目の前の業務が優先になっている現状である。昨年度までチーム活動の位置づけでアクションカードを使用したシミュレーションや机上シミュレーション、避難経路ツアーなどの活動を行ってきたが今年度から委員会の位置づけとなった。さらに、令和6年能登半島地震の発生は、委員会メンバーの災害に対する関心を高めるきっかけになっていることが予測される。活動報告会を通して、町の倒壊した家屋や瓦礫、被災地住民からの声を伝えたことで、委員会メンバーにも「被災する」という現実がイメージできたのではないかと考える。今回の経験を活かして、一人でも多くの職員が危機意識をもち、減災への取り組みに参画できるようこれからも院内の活動を継続していきたい。